A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI

TOSABUSHI

とさぶし

高知県は、ひとつの大家族さき。

高知家

No 48

kochi 再発見 discovery 新発見

TAKE FREE

夏のこども

遊ぶことがいちばんの学び!

夏のこども

遊ぶことがいちばんの学び！

「自由でおおらか」「心が温かくて誰にでも親切」そんなふうに表現される高知人。
今回、学校での学習という枠にとらわれない、
高知でいろいろな夏の体験や挑戦をする「夏のこども」に注目し、
高知人が育つルーツを探った。

はじめてのとびこみ

勝間小五年　岡村　貴博

はじめてのちんか橋からのとびこみ。
弟のよっちゃんもとびこんだ。
ぼくも、まけちゃおれん。
足をおもいっきりふんばって
グンと橋のへりをけった。
「うわー。」どんどん加速する。
うきぶくろにつかまっているよっちゃんが
どんどん近づいて、
川にすんぜん。ドボーン。
足がそこにペタッとついて足をかがめた。
水面がキラキラと緑に光っていた。
うわー深けえ。
息がもたんなってグンと底をけった。
水の上に顔を出して、
思いっ切り息をすうた。
また、とびとうなった。

やまもも第20集（平成8年）

詩集『やまもも』にみる 夏のこども

「異なった環境の中で今を懸命に生きるこどもたちの姿、真実の声を、みんなのものにしたい」という願いのもと、昭和52年に創刊された高知県こども詩集『やまもも』は48集に。掲載された詩から、高知人のルーツを探る。

夏のこどもがきらきら輝いている『やまもも』に満載の高知人のルーツ

こどもたちが紡いできた詩から見えてくるのは、高知で暮らすこどもたちのありのままの姿。詩の題材は、自然や遊びのこと、社会のこと、家庭のこと、学校のことなどさまざまで、各集掲載の約350編の詩に「その子らしさ」がキラリと光る。夏を題材にした詩では、高知の自然をダイナミックに表現したものや、夏休みの宿題のこと、祖父母の手伝いをしたことなどが並び、楽しいものもあれば、本音ズバリのもの、うまくいかなくて悔しかったことなど、こどもならではの表現がなんともほほ笑ましい。長きにわたって『やまもも』の編集に携わっている上杉さんと丹下さんは「『やまもも』は、高知のこどもの教育を支えてきた柱の1つ。詩を書くことはこどもの自己確立につながり、詩を読んだ人は作品から元気やパワーをもらえます。県全体でここまで熱心に取り組んでいる例は他県には無いので、これからも続けていきたい」と話す。

児童詩教育に真摯に取り組む先生、頑張って詩を書くこどもたち、出版面や報道面で支える地元の企業、『やまもも』を楽しみにしている多くの人々。たくさんの人たちの愛と熱意によって支えられている『やまもも』は、高知にしっかり根付いた貴重な教育文化になっている。

やまもも会

左：会長 上杉（うえすぎ） 美和（よしかず）さん　右：副会長 丹下（たんげ） 主教（かずのり）さん

『やまもも』の企画・編集を行う「高知県児童詩研究会」を支援し、児童詩教育のさらなる普及と発展を目指して活動する「やまもも会」の会長と副会長。ともに、高知県の元小学校長。

夏の遊びが高知人のルーツ！

暮らしのすぐそばに自然がある高知では、こどもたちはどんなふうに遊び、どんな経験をしているのだろう。山、川、海、それぞれのフィールドでこどもに遊びの体験を提供している「遊びの達人」に話を伺った。

森は気づきと発見の宝庫

自然とのつながりを感じられる山 歩みを進めるたびに発見がある

「ここは森の入り口。まずは関心を持ってもらい、森の中へ一歩踏み出すきっかけになれば」。そう話すのは「甫喜ヶ峰（ほきがみね）森林公園」でインストラクターを務める佐藤さん。こちらはもともと県有林を整備した公園で、敷地内には森林学習展示館やキャンプ場があるほか、手付かずの自然が残るエリアがたくさんあり、そこでこどもたちはいろいろな遊びや体験をしているという。森林率全国1位の高知でも、自由に遊べる山は意外と少なく、そんな中で「こどもを山で遊ばせたい」と親が連れてくるケースも多いという。「生き物を見つけたり、植物を見たり、森の中はただ歩くだけでも発見の連続です！始めは怖がっていた子も終わる頃にはニコニコして、何回も遊びに来てくれたりするんですよ。高知の豊かな自然がおおらかな人間性を育ててきたのだと思います」と話してくれた。

森の中に流れている川の近くでサワガニを発見！山と川のつながりや、いろいろな生き物がすむ豊かさを、遊んでいるうちに自然と学ぶことができる。

教えてくれた人 **佐藤（さとう） 知幸（ともゆき）さん**

「高知県立甫喜ヶ峰森林公園」の指導員。学校での座学やフィールドワークの授業も行っている。

「川ガキ」はピンチに強い

四万十川財団では毎年7月25日の「四万十川の日」に親子を対象とした「しまんと川ガキDAY」を開催している。流域外からもたくさんの参加があるという。

教えてくれた人 神田（かんだ） 修（おさむ）さん　四万十川流域の小学校などで環境学習の講師を務める。川釣りやエビ捕りなど、川遊びが好き。

夢中で遊ぶこどもたちの心と体をたくましく育てる美しい川

四万十川流域で環境学習やSUPをしたり。服をびしょびしょにしながらいろいろな川遊びをすることが、こどもにとって大事な経験になるんだと思います」。そんな川が大好きな「川ガキ」について、神田さんは思うこと。

安全管理を手がけている「四万十川財団」の事務局長である神田さんは、「高知の川って、まず泳ぐことができて、しかも捕った魚やエビは食べることができる。他県と比べるとスタートラインが断然違う」と話す。美しい川には、こどもの多様な好奇心を刺激するとともに、それを受け入れる懐の深さがある。

「手長エビやサワガニを捕まえたり、アメゴ釣りをしたり、気に入った石を探したり、カヌーやピンチを乗り越える経験もしているんです。知識だけじゃない、心身のたくましさみたいなものも、川は教えてくれるんじゃないでしょうか」。

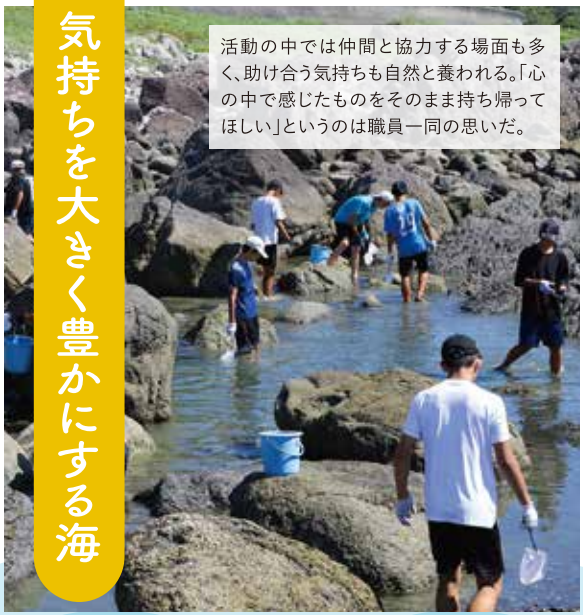
とがある。「川ガキたちって、昔は特に、溺れかけたり、浅瀬に帰れないといった、こどもながらに

多様な生き物に触れることで育つ命の大切さや海の恵みに感謝する心

訪れたのは「室戸ユネスコ世界ジオパーク」に認定された室戸（むろと）市の海岸。ゴツゴツとした岩場には多数の潮だまりがあり、高校生が夢中になって磯観察を行っていた。「磯には多くの生き物がいて、その多様性は人間にも当てはまります。個を尊重することの大切さや助け合う気持ちが、この活動を通して養われているのではないでしょうか」と話すのは「国立室戸青少年自然の家」で海洋活動を指導する垣内さん。これまで多くのこどもたちを見てきて思うことは、本物を見たり、聞いたり、体験することが学びにつながるということ。そして自然の中の体験こそこどもにとって大切であるということ。

「このような自然環境はめったにない」と他の職員も口をそろえて言う高知の恵まれた自然。それぞれのフィールドで遊び、体験することが、こどもたちの心を耕し、豊かにしている。

気持ちを大きく豊かにする海



活動の中では仲間と協力する場面も多く、助け合う気持ちも自然と養われる。「心の中で感じたものをそのまま持ち帰ってほしい」というのは職員一同の思いだ。

教えてくれた人 垣内（かきうち） 洋介（ようすけ）さん
「国立室戸青少年自然の家」の企画指導専門職員で、現在はおもに海洋活動を指導。小学校教員より派遣。

大人の「専門家」と一緒に仕事に取り組むこどもたち。仕事は50種類以上あり、会場の「ハローワーク」で募集中の仕事から選ぶことができる。

「とさっ子電鉄」で電車の運行に取り組む様子。働いた時間に応じてタウン通貨「トス」を受け取り、税金も払うことで、社会の仕組みを体験している。

令和6年の夏に「高知市文化プラザかるぽーと」で開催された「とさっ子タウン」は、過去最多の約500名のこどもたちが参加した。

とさっ子タウンの夏

こどもたちに「社会やまちづくりに興味を持ってほしい」「高知を好きになってほしい」という思いから始まった、夏のイベント「とさっ子タウン」。今回、その運営のサポート役たちにせまる。

夏休みに現れるこどもが主役の架空のまち

平成21年に始まった「とさっ子タウン」は、夏休みの2日間だけ現れる「架空のまち」。「市民」になると、まちのハローワークで仕事を探す、約50種の仕事場で働く、お給料をもらう、納税する、買い物する、遊ぶ、食べる、学ぶ、友達をつくる、投票する、市長や議員になって議会で話し合うなど、多様な体験をしながら社会の仕組みを知ることができる。小学4年生から中学3年生までの市民の活動をサポートするのは、約100人の学生ボランティアをはじめ、高校生・大学生・社会人で構成される約80人もの実行委員たち。県内のさまざまな企業や団体、専門家も協力している。

放送局でアナウンサー！

雑貨屋で制作した小物を販売！

サポート役になって初めて見えてくること

とさっ子タウンの市民をサポートする学生ボランティアには、とさっ子市民の経験があるメンバーも多い。今回、取材に応えてくれた高校生のボランティアの3名も、みな市民だったという。「とさっ子タウンでまちづくりの面白さや楽しさを知った」という長野さんは、「もっともっと関わりたくて、学生ボランティアをしてます。大学生になったら、実行委員会に入りたい」と言う。会場で市民の活動をサポートする島本さんも「支える側って楽しい！」と笑う。市民だった当時、とさっ子タウンで雑貨店を起業した経験のある岩本さんは、「こどもが主役なので、自分は裏方として何ができるか考えますね。この経験は実際の社会に出てからも役立ちそう」と話す。とさっ子タウンは、学生ボランティアたちにとっても、貴重な社会経験を積む機会になっているのだ。

こどもの市民と直に接するのが高校生のボランティア。市民にとっては頼もしい存在だが、高校生もまた異なる世代との交流を通じて成長している。

島本礼（しまもとれい）さん（右）
岩本瑠椰（いわもとるな）さん（中）
長野哲己（ながのさとき）さん（左）
3人ともとさっ子タウンの元市民で、現在は高校生。今回は学生ボランティアとして参加。

会場のあちこちで、こどもたちと接する尾木さん。市民だった当時の経験を生かしながら、こどもたちが市民として楽しく過ごせるように声かけをしている。

意欲ある若者を経験豊かな大人が支える

このように高校生や大学生といった若者も活躍しているとさっ子タウンだが、実は歴代にわたって実行委員長を務めてきたのは大学生。今年から実行委員長に就任した尾木さんも、現在大学1年生だ。「小学5年生の頃からとさっ子タウンに来ています。『裏方として参加してみたいな』と感じて、高校生になってからは実行委員として活動してきました」と話す。「まちでの過ごし方やこどもの思いなど、とさっ子市民だったからこそわかることを主張したい」という思いを強く持っているという。実行委員会の若者たちを支えているのは、それぞれの場所でまちづくりに取り組む、経験豊かな大人たち。尾木さんは「今はとにかく楽しくて、とさっ子タウンで活動しています。まだ大学1年生なので、ここでいろいろな交流や経験を積んでいきたい」と語ってくれた。

尾木青海（おぎあおみ）さん
高知市出身。現在、高知工科大学1年生。市民として参加したことをきっかけに、とさっ子タウンの運営にも興味を持つ。現在、実行委員長を務めている。

いろいろなシーンで市民の前に立つボランティアの高校生や大学生たち。その姿を見たこどもたちは、「自分もまたサポート側で参加したい」と思うようになっていく。

カーショップで車をデザイン！

『とさっ子タウン』元市民のいま

とさっ子タウンの市民だったこどもは、実際の社会に出て、どんなふうに活躍しているんだろう。実行委員として活動する社会人のメンバーに、当時の体験や思い出、現在の思いを聞いた。

当時

とさっ子タウンから派生したプロジェクト「とさっ子駅弁開発」にも参加していたという松本さん。2年にわたって高知の食を探求した。

高知で働く自分の姿が想像できた瞬間

当時は毎年のようにとさっ子タウンに参加していた松本さん。「改めて振り返ってみると、今の自分につながる体験がたくさんありましたね」と話す。現在は地元の銀行で働くが「それこそ銀行の仕事も体験して。とさっ子タウンでのいろいろな経験が『高知で働くこともいいな』と思えた一番のきっかけです」。とさっ子タウンで見た大人たちは「高知にいたらできることがこんなにある！」と感じられた存在。今度は自分がそうなりたいと意気込む。

松本佳奈（まつもとかな）さん

高知市出身。第一回開催の小学4年生から中学1年生まで、とさっ子タウンに参加。地元金融機関に就職した現在も副委員長として運営に携わっている。

当時

市長時代、とさっ子議会で「障がいのあるこどもも参加できるまちにしたい」と提案したり、今後のとさっ子タウンについての話し合いを当時の高知市長とするなど、さまざまな活躍をした。

こどもの発想で市長になった経験が生きる

片岡さんは、初参加のとさっ子タウンで市長選に立候補。「みんなの給料を上げます！」という公約を掲げて見事当選したが、市長としての仕事は想像以上の苦労があった。「給料が上がっても税収は上がらず、まちの公共サービスも悪くなった。結果的に不評でしたね」。それから3年にわたって市長を務める中で、税収確保の工夫を行い、責任感を持ってまちづくりに取り組んだ。この春から東京で会社員として働きながらも、実行委員としての関わりは継続している。

片岡優斗（かたおかゆうと）さん

高知市出身。小学5年生でとさっ子タウンの二代目市長に就任。大学時代は実行委員長も務めた。社会人となった現在も実行委員として活動中。

こどものチカラを信じよう

実行委員たちの合言葉は

コラム

真夏の高知で開催が続くとさっ子タウン。これまで参加した市民の数は延べ４０００人にも上るという。現在では、日本全国から官民問わず視察が来るほど注目を集めているが、そもそもはドイツで隔年開催されている「ミニ・ミュンヘン」を参考に誕生した。

毎年の運営を支える実行委員たちは、およそ80名。合言葉は「こどものチカラを信じよう」だ。実行委員会では、こどもたちがいかに自主的に、主体性を持って活動できるまちにするか、その仕組みを一年かけて話し合い、作り上げている。新しい時代に新しい発想で取り組み、道を切り開いていく「未来の土佐人」が数多く育っていくことを願っている。

「おらんくの室戸大学～サマーセミナー～」で

こどもも センセイに！

「サマーセミナー」は誰でも「センセイ」、誰でも「セイト」になれる学校ごっこ。地域から集まった中学生・高校生や市民が「好きなこと」や「推し」を講義する、夏限定の学び場が開かれる。

教室の教壇に立つ高校生の「センセイ」。8月18日の室戸セミナーでは、全49コマの授業が開かれ、さまざまな地域から訪れた、延べ742人の「セイト」が聴講した。

イベントは高知大学や室戸高校の生徒らが主体となった実行委員会が企画。

こどもセンセイが行った授業

みんなで作ろうつまみ細工
センセイは室戸高校ホームメイド部で、布で花を作る「つまみ細工」教室を開講。キーホルダーや髪飾りなどを作成した。

室戸市の防災について考える
新潟県糸魚川市を訪問したことをきっかけに、防災に対する意識が高まった高校生。専門家と一緒に室戸の防災を考えた。

名作ゲームから学ぶ「文永の役」
「文永の役」の対馬を舞台としたゲームソフトを活用し、中学生が教科書には書かれていない武士の歴史ロマンを熱弁。

認知症って？
高校生が、劇やVR（仮想現実）ゴーグルを活用し、認知症患者の幻症状を体験できる授業を展開。

中学生が語る「軍艦史」
世の中に軍艦が生まれ、近代に至るまで、軍艦はどう変化していったのか？軍艦史の変遷を中学生が詳しく解説。

教える楽しさも難しさも学んだ夏休み

令和5年に四国で初めての開催が叶い、地域の新しい学びの場として注目を浴びた「おらんくの室戸大学～サマーセミナー～」が、今年も室戸高校で実施された。このセミナーは地元の中学生・高校生や市民が、自分の〝推し〟を講義する「センセイ」として、また授業を聴講する「セイト」として参加できるイベント。中学生・高校生が教える側の経験を積んだり、市民が趣味について語ったりするなどユニークな展開が魅力となっている。実行委員長の宝金さんは「主体的に学ぶ楽しさや、地域のことをよく知る機会を共に創造していきたい」と話す。「地域の人たちと一緒に学ぶ」という体験が、地域に新たなつながりを生み出し、地域の結束が強化されることも期待されている。

本プロジェクトは、内閣府の「戦略的イノベーション創造プログラム」における「主体性を醸成する生涯学習プラットフォームの構築」の一環としても行われている。

「難しかった」との感想が多かった「センセイ」役。教え方や言葉選びの大切さを学ぶ経験となった。

実行委員長
高知大学 特任助教 博士（学術） 宝金実央（ほうきんまお）さん

よさこい

追手前小六年　横山　聡子

よさこい祭りでこどもが成長する！

高知で行われている祭りを改めて見てみると、祭りの経験を通して成長するこどもの姿に気づく。今回は高知を代表する「よさこい祭り」に参加するこどもたちの姿を追った。

伝統復活を目指して奮闘する高校生

帯筋本隊の後ろに続くのがジュニア隊の隊列。黒と白のストライプに「帯筋」の文字が大きく入ったおなじみの衣装に「Jr.」のロゴが光る。来年こそジュニア隊復活を目指し、こどもたちは熱い夏を踊り抜いた。

高知の夏の風物詩「よさこい祭り」。今年行われた第71回大会に参加した踊り子の総数は約1万7000人で、その中には高校生以下のこどもたちの姿もたくさん見られる。しかしここ最近はこどものみで構成されていたいくつかのチームも、参加者が集まらないなどの理由で出場を断念している。

今回訪ねたよさこいチームの「帯屋町筋（通称：帯筋）」も、ここ数年は令和元年まで単独出場していた「帯屋町筋ジュニア隊（以下：ジュニア隊）」を吸収する形で出場している。そんな中、小学生から高校生を取りまとめているのが、高校生インストラクターだ。皆、小学校低学年からジュニア隊でずっと踊ってきた生粋のよさこい好きで、「教えられる側から、いつの間にか教える側になっていました」と笑う。こどもがこどもに踊りを教え、面倒を見るというのは、よさこい祭りではよくある光景で、ジュニア隊でも代々受け継がれてきた。「来年こそはジュニア隊を復活させ、帯筋が築いてきた伝統をつないでいきたい」と思いを熱く語ってくれた。

限られた時間で行われる練習も真剣勝負。高校生たちは大きな声を出してこどもたちを指導していた。

よさこいチーム「帯屋町筋」の高校生インストラクター

左から

井上（いのうえ） 舞乙（まお）さん・曽我（そが） 唯花（ゆいか）さん・藤澤（ふじさわ） かなうさん

高校生インストラクターのリーダー曽我さんの父で、自身も3歳から帯筋一筋の佳弘（よしひろ）さんによると「こどもにはこどもから伝える方が話を聞く」のだそう。こどもなりに考えて行動し、成長していく姿を大人たちは静かに見守っているのだとか。

土佐の一高知の一ハリマヤ橋で
よさこい　よさこい

エレキギターで、ロックがはずむ。
いよいよ、おどりが始まった。
顔から汗が、ドロドロ吹き出る。
たび底がはげて、足のうらが痛い。
ふくらはぎの筋肉が引きつる。
指にできたまめも、なるこでつぶれた。

夜になった。
よけいにみんな乗って来た。
ロックの音も　ますますはげしい。
出されたジュースが、おいしい。
九時を過ぎた。
あーあ、すっかりつかれた。
みんなの鼻の下やおでこの汗が
ライトにキラキラしながら流れた。

やまもも第7集
（昭和58年）

よさこい祭りでは、運営側にこどもが携わっていることもある。中でも「梅ノ辻（うめのつじ）競演場」では、踊り終わった踊り子を迎える給水場で地域の小学生と中学生が手伝うのが通例となっている。

「この辺りは昔から特に地域のつながりが強く、大人に混ざって手伝うこどもが毎年いて助かっています」と、梅ノ辻競演場代表の服部一浩（はっとりかずひろ）さんは言う。さらに今年は岡豊（おこう）高校のサッカー部が7会場の給水場運営を手伝いながら、大きな声を出して踊り子をねぎらい、場を盛り上げていた。

大人と一緒になって祭りを支えるこどもの姿に「面倒見が良くておせっかい」の高知人の県民性を垣間見た。

自主的に参加し祭りを支える力

ひっきりなしにやって来る踊り子に、手際良くお茶を準備する岡豊高校のサッカー部員。顧問の西野大祐（にしのだいすけ）先生がよさこい関係者とつながりがあったことから、今回初めてこのような取り組みが実現した。

コラム

江戸時代から続く

前浜のエンコウ祭り

提供／南国市教育委員会

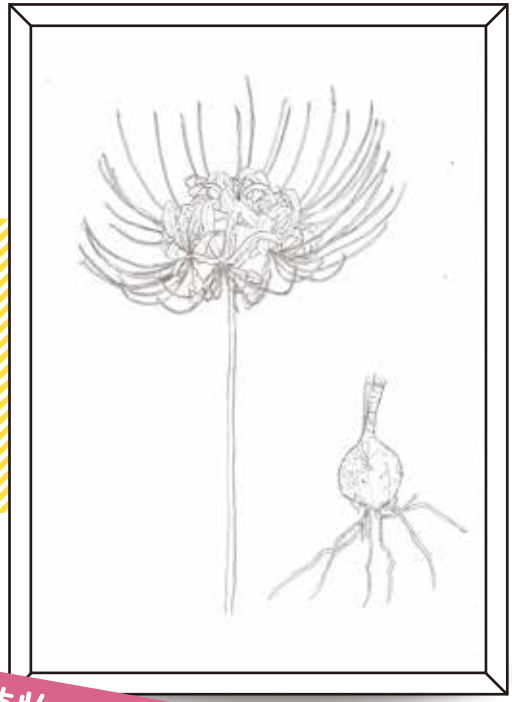
他県の河童（かっぱ）に相当する水の妖怪「猿猴（えんこう）」を祭り、水難事故防止を祈願する「前浜のエンコウ祭り」。毎年6月第1土曜に南国市で開催されており、これまで祭りの主役はこどもだった。最年長の「大将」を中心に小学生から中学生までのこどもたちが、寄付金集めや清掃活動などの準備を行い、当日はショウブでお社（やしろ）を作り、エンコウの好物のキュウリの酢もみやお神酒（みき）を供えて水難事故防止を祈念する。しかしここ最近は、地域のこどもの数が少なくなり、準備の大半は大人が行っているという。前浜地区活性化協議会会長の髙木貞夫（たかぎさだお）さんは「それでも伝統は絶やされんという思いで、祭りを続けています。いつかまたこども主体でできる日が来てほしい」と話してくれた。

ホーム

地元で宿題をしよう！

その地域にある自然や、その土地で生まれた偉人にちなんだ「地元ならではの宿題」が、改めて自分たちが住む場所を知るきっかけとなり、人と人をつなぐ役割も果たしていた。

10センチ四方でなるべく薄い石を探し、絵の具やポスターカラーで絵を描き、ニスを塗って仕上げる。今年は中村地域の小中学校を中心に、全19校に協力してもらい、約2500個の作品が集まる予定。マラソンコースにちなんで沈下橋の絵が多い印象。



植物画に取り組み 興味関心のきっかけに

佐川町

絵の上手い下手は関係ない。よく観察し、特徴を捉えることができているかどうかが重要視される。各校から選び抜かれて集まった約180作品が展示され、その中から優秀賞及び優良賞を表彰する。植物画の審査をするのは、美術ではなく理科の先生。

じっくり観察することで育まれる探究心

植物学者、牧野富太郎博士の故郷、佐川町の小中学校では、植物画を描く宿題が出される。こどもたちは、夏休み中に植物を探し、小学生は絵の具や色鉛筆、中学生は鉛筆などを使って植物を描く。実際に植物を手に取って観察したり、撮影した写真を見たりと描き方はそれぞれだが、目指すのは葉脈や花弁など細かいところまで表現された、牧野博士が描くような植物画。身近にある植物に目を向け興味関心を持つことは改めて地元を知ることにつながり、また植物をじっくり観察することで探究心も育まれる。

各学校で選び抜かれた作品は、同町の文化会館「桜座」で行われる「牧野賞科学展・科学研究発表会」で展示される。植物画は正確性が求められる一方で、同じ植物でも人によって捉え方が異なり、写真と違った魅力がある。スミレやアサガオ、ヒマワリにツユクサなど、個性が光る作品が今年も桜座に並ぶのを、多くの町民が楽しみにしている。

お母さん、ほめてや

加茂小六年　中澤　光喬

夏休みにすいかの絵を描いた。
鉛筆でさっさと下書きをして
赤、緑、黒でどんどんぬった。
こだわったのは種の色。
小さい筆で細かくぬった。
「ううん。なかなかいい出来だ。」
思わず口に出た。
夕方、お母さんが帰ってきた。
「上手にできちゅうね。」
絵を見て、ほめてくれた。
「そうやろ。賞とれるがやない。」
ぼくが自慢したら、
お母さんが笑いながら言った。
「それはない。」
ぼくは思った。
そうやね、でいいやん。

やまもも第48集（令和6年）

ふるさとを描いた石で ランナーと交流

四万十ならではの良いトコロを宿題を通じて再発見！

四万十市の小中学校では夏休みの宿題に「四万十川で拾った石に絵を描く」というものがある。毎年10月に行われる「四万十川ウルトラマラソン」のランナーへ、四万十市ならではのものを記念に渡そうと、今から30年前に始まった取り組みで、石には沈下橋や四万十川の生き物などが描かれる。裏面に学校名と名前を書いたり、「来年も来てね」とメッセージを書く子もいたりと、ランナーと地元のこどもたちが交流する機会にもなっていた。ランナーにとっては唯一無二のお土産になり、こどもたちにとっては改めて地元の魅力に気づくきっかけとなって、1人で何個も描くほど夢中になる子もいたのだそう。

ここ数年は休止していたものの、「またやってほしい」というランナーからの声も多数あり復活が決定。今年は石ではなく、四万十市と四万十町の特産品「四万十ヒノキ」の端材にこどもたちが絵を描き、5年ぶりにランナーの手に渡る予定だ。

石を選ぶランナー

懐かしい「夏のこども」

素晴らしい夏休み教材があった！

昭和から平成にかけて発行されていた「夏のこども」は、高知県内の小学生を対象に、地元の先生たちが制作していたオリジナル教材だ。算数や国語、社会といった一般教科の宿題はもちろん、作文や自由研究などの手引きもあり、学年ごとに制作されるこの一冊で、夏休みの自宅学習を支えていたという。当時、発行に携わっていた野中美宏（のなかよしひろ）さんは、「制作には100人くらいの先生が関わっていましたね。『高知のこどもたちが長い夏休みを有意義に過ごせるように』と、学習課題だけでなく、こどもが描いた夏休みの絵や詩も載せていました。『こんな夏を過ごしてみて』という、地元の先生からこどもたちへのメッセージでもありましたね」と話してくれた。

コラム

田舎のおじいちゃん・おばあちゃんが
高知人のセンセイ

自然の中で遊んだり、仕事を手伝ったりと、田舎での体験はある意味非日常的で、これがこどもをグンと成長させる。さまざまな経験が、高知人の心を豊かにする。

遊びや仕事の手伝いを通して成長するこどもの姿

こども時代の夏休み、田舎のおじいちゃんおばあちゃんの家に遊びに行ったことがある人は多いはず。そこでこどもたちはどんな遊びや経験をしているのだろう。

訪ねたのは、高知県東部にある馬路（うまじ）村。かつては林業で栄え、現在はユズの産地として全国的に知られている。夏場は、村の中心を流れる安田川で鮎釣りに励む釣り人や、川遊びを楽しむこどもたち、そして温泉に入ったり森林鉄道に乗る観光客など、村内外の人で活気づく。今回話を聞いたのは、村の台所的存在である「フードショップきよおか」を営む清岡さん。こどもや孫が帰省すれば一緒に川で遊んだり、キャッチボールをしたり、料理を作ったりと忙しく過ごす。「うちは店をやりゆうき、孫が店の仕事を手伝ってくれてうんと助かるがです。この前の夏祭りではお寿司を２００個ばあ作ってくれて、大事な戦力になっちゅう！」とニカッと笑う。遊びも店の手伝いも「見て学べ」のスタイルで、必要な時にだけ助言をするのが清岡家流。孫の妃里（きらり）さんは「手伝うちに自然と覚えるし、店のレジ打ちは楽しくて好きです」と言う。「遊ぶ」以外に「仕事を手伝う」ということがここでは当たり前になっていて、それもこどもの成長につながっている。

豊かな自然、おいしい料理、笑顔で迎えてくれるおじいちゃんおばあちゃんの存在、帰る故郷がある安心感…。高知の田舎にある、そんな一つひとつの要素と、そこで遊び、学んだ経験が、高知人のルーツにもなっている。

真夏のお手伝い

朝倉小六年　石元明日香

「ありがとうございました」
声を張り上げる

「今日はちょっと濁っちゅうけど見えるろうか」と、最年少の孫・絢生（あやせ）くんと水中観察。昔はもっと水量があり、川の生き物も多かったのだそう。

正午になるといっそう暑さが増して
顔にも背中にも汗がにじむ
それでも
なぜか心はすがすがしい
日曜市の祖母のお店には
たくさんのお客さんが来る
「今日も暑いですね」
「えらいねえ。お手伝いかね」
お客さんとの何げない会話に元気をもらう
小銭の音がチャリチャリと鳴る
計算ミスをしないように慎重に暗算する
となりでは
祖母がていねいにおつけ物の説明をしている
祖母もお客さんも、汗をふきふき話している
太陽がじりじりと照らす中
いろいろな人の声でにぎわう
負けないように私も声を張り上げる
「いらっしゃいませ」

やまもも第47集
（令和5年）

川遊びから帰って来たら昼食の準備。出来たものから孫の手を借りてテーブルに並べていく。部屋の柱には歴代のこどもたちが背くらべした記録がびっしり残る。

この日のメニューは、ユズを利かせたちらし寿司、イタドリの炒め物、唐揚げ、ミートボール、ポテトフライなど。大皿にみんなの好物がてんこ盛り！

フードショップきよおか

清岡（きよおか） 福長（ふくなが）さん・とし子さん

福長さんは馬路村出身、とし子さんは東洋町出身。店は創業52年で、食材などの販売の他、仕出しもしている。

「村の宝」であるこどもたち

みんなに見守られて育つ

「いつか地元の農協で働きたい」こどもの時から抱いていた思いを叶え、令和6年の春から「馬路村農協」の営農購買課で働き始めた笹岡晟（ささおかじょう）さん。小学生の頃、馬路村農協の飲料製品「ごっくん馬路村」をPRするCMに出演していた「初代ごっくん坊や」として、村では知られた存在である。自身のこども時代の思い出を尋ねると「村では、外で遊んでいると必ず声をかけられるし、こどもから大人に話しかけるのも普通のことでした。村のみんなが仲良くて、常に誰かに見守られている感じがして、今でも一番安心できる場所です」と話す。「これからもずっとこの村で暮らします」と真っ直ぐ語るその姿から、みんなに育てられたからこそ育まれた、ゆるぎない「地元愛」が感じられた。

平成24年に放送されたCM「ごっくん坊や就任 篇」。真ん中の少年が笹岡さん。

A TOSA SPICE WORLD IN

高知の薬味の底力

vol.2

今回はショウガ

キラリ、そして「ピリリ」と放つ存在感

高知の食文化に欠かせない

辛くて香り高い「薬味」の数々

歴史、産地、そしてその薬味を使った料理のこと

もっと知りたくありませんか？

高知のショウガ栽培発祥の地といわれるいの町産の大生姜。大きな塊根が連なった見た目が印象的で、辛味と香りが強いのが特徴。

熱帯アジアを原産地とするショウガは、高温多湿な環境を好む。日差しが強く雨も多い高知県は栽培場所に最適だ。

ミネラルが豊富な赤土で育てるのが、いの町での伝統的なショウガ作り。平地や山合いにショウガ畑が形成され、収穫前の畑からはショウガの爽やかな香りが漂う。

話し手

刈谷農園代表
刈谷（かりや） 真幸（まさゆき）さん

いの町出身。栽培や加工品作りに加え、販路拡大まで行うショウガ農家のパイオニア的存在。

高知の万能薬味 ショウガ栽培発祥の歴史

薬味大国の高知県において、最もポピュラーな薬味「ショウガ」。県内全域で栽培が盛んな高知県のショウガの生産量は全国トップで、高知の食・産業ともに、今やなくてはならない存在だ。そんなショウガが高知に伝わったのは大正5年のこと。いの町出身の深田駒次（ふかた こまじ）氏が、「大生姜」（おおしょうが）の苗を取り入れたことに始まる。ショウガが流通し始めると、ショウガ独特の「ピリっとした辛さと、清涼な香り」に多くの県民が魅了された。特に暑い時期の食事の薬味として好まれるようになり、栽培条件も高知の気候に適していたことから、いの町を中心に、その生産域を拡大していったそうだ。

ショウガの慣行栽培と並行して「有機栽培生姜」も手がけるいの町の刈谷農園。太陽や土、水、そこに生きる微生物など自然の恵みを受けて一つ一つ丁寧に育てている。

収穫直後の大生姜は、綺麗に水洗いすることで光沢を放つ。基本的には切り分けて販売されるが、日曜市などではこのままの姿で陳列することも多い。

ショウガの町のパンチの効いた展開

高知のショウガ栽培発祥の地といわれるだけあって、いの町のショウガに対する意識は高い。町内ではグルメな町おこし「いの生姜焼き街道」を筆頭に、農家と地元スーパーがコラボした商品開発、町内のお菓子屋さんによる地元のショウガパウダーを使ったシフォンケーキやクッキーの販売がスタートするなど、面白い展開が進んでいる。中でも、三世代にわたっていの町でショウガ栽培を続けてきた刈谷さんが育てる「有機栽培生姜」は、今日のショウガムーブの足掛かりとなった。本来、ショウガは農薬を使用しないと栽培は難しいとされてきたが、試行錯誤の末に生まれた刈谷さんの有機栽培生姜は、ショウガの清涼感と、パンチの効いた辛さが両立しており、一般的な栽培方法で作られたショウガには真似できない強烈な個性を持っている。刈谷さんはこれまで、自らが育てたショウガを使って、積極的な販路拡大や、高知県産ショウガの認知度向上に努めてきた。今年10月にはパリで行われる見本市「SIAL Paris（シアル・パリ）」に、ショウガを出品予定とのことで、「海外のお客さんを、いの町のショウガでびっくりさせたい！」と意気込みを語ってくれた。

刈谷農園と地元スーパー「サンシャイン」がコラボした商品群。地元産のフレッシュでピリっとしたショウガを、さまざまな形で気軽に味わえると人気を博している。

「森の小さなお菓子屋さん（道の駅633美の里内）」で販売中のショウガスイーツ。甘さを控えたシンプルな味わいの中に、ショウガの風味をしっかりと感じる。

はみだしコラム　いつも楽しみにしています！リュウキュウについてもっと知りたいです！（高知県・40代）

練習内容を理解して取り組み、コミュニケーションを取りつつ、周りをよく見てプレーする姿も印象的。

週に6回の練習をこなし、家に帰ってもサッカーの動画を観るのが習慣になっている叶琉さん。

憧れのバトン

今回の関係
スクール生×サッカーコーチ

いつか同じ舞台に立つため 目標の背中を追いかける

現役の選手が直接こどもたちの指導にあたる「高知ユナイテッドSC」のサッカースクールでは、多くの小学生が練習に励む。叶琉さんもその中の1人で「現役選手からサッカーを教わりたい」と自らの意思でスクールに入った。低学年グループの中でぐんぐんとゴールに迫り、力強いシュートを放つ姿が印象的だ。「ドリブルでディフェンスをかわし、シュートを決められる選手になりたい」と瞳を輝かせながら見つめる先には、お兄ちゃんのように親しみやすい存在であり、憧れのサッカー選手でもある樋口選手の姿がある。樋口選手と一緒に練習をする中で「樋口選手が褒めてくれるのが嬉しいから、もっと上手になりたい」と、以前よりもサッカーへの思いが強くなったという。今は樋口選手と同じポジションの選手になるのが目標だ。

高知ユナイテッドSCの試合の観戦に行った時は、誰よりも大きな声で声援を送るという叶琉さん。将来の目標である樋口選手の背中を追い続け、いつか2人が同じピッチに立ち、声援を浴びる日が来るかもしれない。

スクール生

井川（いかわ） 叶琉（とおり）さん

高知市出身。サッカーをしているお父さんの影響で、3歳からボールに触れる。スクールに入ってからさらにサッカーが好きになり、寝ても覚めてもサッカーに夢中な小学3年生。

午前中は選手として練習し、夕方からはスクールのコーチと、1日を通してサッカーに専念する日々を過ごす。

作る人、伝える人、つなぐ人、遺す人…
ここ高知で、そんな仕事や活動をしている人と
その人がリスペクトする人にスポットを当て
2人の関係性、双方の思い、そしてこれからのことなど
胸に秘めたる熱い思いをひもといていく

憧れのまなざしを受けて さらなる高みを目指す

「こどもたちにはサッカーの楽しさを知って、もっとサッカーを好きになってもらいたいです」。そう話すのは、高知ユナイテッドSCのミッドフィルダー樋口選手。毎週開催しているサッカースクールで、コーチとしてこどもたちにサッカーを教えている。叶琉さんについては「自分も小さいころからドリブルが好きだったので、叶琉さんのようなドリブルが上手な子はやっぱり目に留まりますね」と印象を語る。他にも練習やプレーにじみ出る前向きな姿勢など、叶琉さんには自分と共通する点があり、当時の自分にアドバイスをしているつもりで指導にあたっているという。そして、素直で一生懸命で、自分よりも体格が良い子にも立ち向かう叶琉さんの姿を見て、選手としても学ぶことが多くあるそう。「僕自身、得意のドリブルを生かしてチームを勝利へ導くのはもちろん、初心を忘れずサッカーを楽しみたいです」。

身近な存在の樋口選手が、高知らしい鳴子をモチーフにしたユニフォームを身にまとい、ピッチに立ってプレーをする姿は、きっとこの先も叶琉さんにとって憧れであり続けるだろう。

サッカーコーチ
高知ユナイテッドSC **樋口（ひぐち） 叶（かける）さん**
熊本県出身。平成13年生まれの23歳。令和4年に「ロアッソ熊本」から「高知ユナイテッドSC」に移籍。高知県民の印象は「温かい、フレンドリー、酒飲み」。

常に前を向いて突き進み、お互いにいい刺激を与え合える環境。高知のサッカー文化への波及効果が期待できる。

はみだしコラム　カツオと坂本龍馬だけじゃない高知県の魅力は宇宙みたいです。（神奈川県・30代）

ワカモノがゆく！ vol.2

土ノナェ文化ノ体験記

高知県内各地で脈々と継承されてきた地域の文化を、ワカモノたちが初めて体験！
今回は、四万十町十和に伝わる川エビ漁に、地元の小中学生がチャレンジしました。

清流・四万十川で育まれる川の幸と伝統漁法はこれからも受け継がれていく

高知県西部を流れる四万十川では、源流域から河口域に至るまで、多様な生態系が見られる。「川エビ」もその一種で、体長約10センチの雄はハサミが長いことから「テナガエビ」とも呼ばれる。6～8月末にかけて漁獲され、煮付けや唐揚げで食べられることが多く、地元の人々にはなじみのある川の幸だ。

川エビの夜行性の習性を利用した川エビ漁は、今でも四万十川で行われる伝統漁法。竹で編んだ筒や木筒を使った「ころばし漁」や、小枝などの柴を束ねて仕掛ける「柴漬け漁」などいろいろな漁法がある中で、今回体験したのは「エビ筒漁」。手作りの筒にエサを入れ、数日間川辺に仕掛けてエビを捕獲するというも

見たことはあるけど仕掛けを作るのは初めて！

体験者（代表）

しば じょうすけ
芝 丈介さん

四万十町出身。十川中学2年生。学校のカリキュラムで模擬会社「株式会社のぼりん」を設立し、キャラクターグッズを作って販売するなど、地域のPRに取り組む。

四万十町

エビ筒漁

「エビ筒漁」は、十和地区で始まった川エビの漁法のひとつ。この漁法が定着するまでは、地域の人は友人や家族と遊びに行く感覚で川へ行き、網や素手で川エビを捕まえていたのだそう。それくらい川エビは身近で、手軽に捕まえることのできる生き物だった。またこの地域は「こいのぼりの川渡し」発祥の地として全国的にも知られる。

問い合わせ／0880-28-5801
（しまんと分校連絡協議会）

1.矢野さんの説明を真剣に聞いた後は、みんなで協力して仕掛け作り。2.講師を務めた「しまんと分校連絡協議会」の矢野健一（やのけんいち）さん（左）と佐々倉愛（ささくらあい）さん（右）。 3.川エビが潜んでいる石の下に手作りの仕掛けを設置。 4.翌朝、仕掛けを確認してみると川エビが捕れており、各々の川エビを笑顔で見せ合った。

ので、ここ四万十町十和で今から約40年前に始まった漁法である。

そんな地域に根付く漁に、地元の小中学生が初めて挑戦。仕掛けは、塩ビ筒、ネット、針金といったホームセンターで手に入るものを使用しており、身近にある素材で作ることができるのもエビ筒漁の特徴だ。

いつか思い出してもらいたい川とともにある暮らしに思いをはせて

「自分で作った仕掛けに何が入っているかワクワクする」と話すのは、中学2年生の芝さん。夏が来ると近所の川に仕掛けの目印となる浮きがある様子は見てきたが、仕掛けを作るのは初めて。講師を務める矢野さんの話を真剣に聞き、作業が始まると、意見を出し合いながら没頭する様は大人顔負けだ。

川エビ漁を終えて川で遊ぶこどもたちを眺めながら矢野さんは「今のこどもたちは昔に比べて川で遊ぶ機会が減りました。すぐそばにこんなに魅力的な川が流れているので、大人になった時にこの景色を思い出してもらいたいですね」と話してくれた。

はみだしコラム 高知の文旦が大好きです！文旦シーズンが待ち遠しい～！（東京都・20代）

つないでつむいで 県史編さん室

高知県史（自治体史）とは？

高知県について伝え残されたさまざまな資料を調査し、本県の歴史を詳細に記したもの。郷土の歴史を知る、大切な手がかりだ。

【上段右】高知小津高校の開成門【上段中央】校友会室に残されていた学校資料【上段左】撮影と目録作成を行い、中性紙保存箱に入れて返却【下段右】資料レスキューの様子【下段左】廃校に残されていた学校資料

「海南」の伝統を受け継ぐ学校資料

学校にある文書類、教材教具、写真や動画、児童生徒の作品、部活動やＰＴＡ活動の記録などが「歴史資料」と聞けば驚かれる方もいるのではないだろうか。最初に紹介する高知小津高校には、幾多の校名変遷や校地の移転、戦災などを乗り越えた古い学校資料が保管されている。その歴史は、明治６（１８７３）年、旧藩主山内家が東京の旧藩邸内に創立した海南私塾にはじまる。校友会室に残る資料群をひもとくと、大正から昭和初年の県立中学海南学校（海南中学）の規程、学校予算に関係する書類、同窓会関係の資料、山内家との交流を示す文書などを確認できる。また、現在高知小津高校が所在する城北町で創立され、昭和７（１９３２）年海南中学に吸収合併される形でその校名が消えた旧制城北中学校の資料が含まれていることは注目される。同校資料の調査から、本県の近代教育史の一分野が形作られてゆく。

レスキューされた廃校の資料

学校資料は近年、学校や地域の歴史をつたえる資料として注目されるようになり、県内でも保存や活用の動きが高まっている。

土佐清水市では、平成初めに廃校になった小学校舎で発見された大量の資料を令和２年に保存・整理し、旧中浜小学校に保管している。貝殻をベニヤ板に貼って校章を模した卒業記念パネル、地域で採取して作製された魚類や昆虫の標本といった珍しい資料とともに、明治以来の学校日誌、学校行事の記録、文集、地域だよりなど、貴重な文書類が残されていた。

県民のくらしを軸に戦後高知の歴史をつづろうとしている現代部会では、旧中浜小学校の文書類を調査し、当時の子どもたちの学びや活動、保護者や地域住民の生業（なりわい）などを掘り起こし、高知県の教育や県西部の現代的特徴を捉えようとしている。

新たな県史では、県内に残る学校資料にも光を当て、地域の教育やくらしを描き出す。

第十回　四万十町郷土資料館

史料が語るもの語

清流・四万十川。その上流域にあたる四万十町大正には、町の郷土資料館が建っている。そこでは、林業や漁業などの民具の他、縄文人や弥生人が残した考古資料が展示されている。

土鍋の縁のように粘土紐を貼り付け、その上下に連続して刺した文様を施している。

江師遺跡より出土した、瀬戸内地域の特徴を持つ縄文時代前期の土器。

瀬戸内地域と関わりのあった江師（えし）遺跡

江師遺跡は、四万十川の支流である梼原川の右岸、四万十町江師に所在する縄文時代と弥生時代の豊富な生活道具が出土した遺跡である。

それらの中でも、写真の土器は大変興味深く、口からやや下がったところに土鍋の縁のように粘土紐を貼り付け、それを挟むように直線状に連続して刺した文様を施している。

この土器は、瀬戸内地域の縄文前期（約７０００年前）に見られる土器とよく似ているが、県内の他の地域では出土していない。よって、この地域の個性を示す資料と言える。

高知県史考古編は、地域の個性に光を当てることを意識して、編さんを進めていく計画だ。

四万十町郷土資料館（四万十町）

高知県の歴史に触れる

県史特集

資料調査にみる本当の土佐史

今回のテーマは、今に残された古文書の解読作業。県史編さんの基礎となる資料の収集や解読の現場には学生たちが中心となる「歴史資料調査隊」も参加。その養成講座で、「本当の土佐史」が垣間見えた。

高知県立高知城歴史博物館の一室で行われた、「史料解読」の養成講座の様子。渡部部会長（中央左）が指導しながら、学生たちが実際の古文書を読み解き、研究資料として誰もが利用できる状態に整えていく。

膨大な数の歴史資料に目を向けていくのは調査隊の学生たち

県史編さんの土台となるもの。それは、今に残された歴史資料だ。県史編さん室では、日々古文書等の資料を画像データとして収集・保存しており、その数は数十万点にも及ぶ。しかし資料は、ただ保存されればいいわけではない。いつ、だれが、何について書き残したものなのか、ひとつひとつの内容が解読され、分類・整理され、リスト化されることではじめて、それらを基礎とした歴史研究を始めることができる。

今回、紹介するのは、こうした手のかかる膨大な作業を日々行っている「歴史資料調査隊」。そこで中心となっているのは、若い学生たちだ。調査隊の養成講座も行われており、多くの学生たちが古文書等の画像を撮影する「資料撮影」や、過去の体験を記録する「聞き書き・動画撮影」などを学んできた。今回、近世部会の渡部部会長が講師を務める「史料解読」の講座を訪ねると、江戸時代の実際の古文書を手に取りながら、資料の解読に初めて取り組む学生たちの姿があった。

古文書を読み解き地道に整理していく県史編さんの現場

当日の講座で学生たちが解読していたのは、武市半平太の生誕地としても知られる、長岡郡仁井田村吹井（ふけい、現・高知市仁井田吹井）の地主の家に残されていた借用証の類。主に村人の借金にまつわる記録だが、その人が困窮にいたった理由などに、当時の地域情勢を解明するヒントが残されている可能性もある。文書の一点ごとに「史料調査カード」を作成していくが、文書を読み解き、様式や保存状態を判断し、記入するための専門知識が必要な作業。資料としてすべての情報を共有するため、例えば防虫剤として銀杏の葉が一枚封入されていたら、そのことも記入する。「資料調査に必要な注意深さを養うには、とにかく多くの古文書を読み込むこと」と渡部部会長は言う。

養成講座に参加した学生たち。博物館などの学芸員を目指している参加者もあった。

生きた土佐人に触れるリアルな体験が次の土佐人を育成する

「有名な武将の手紙とかだけでなく、名もなき人が残した地方（じかた）文書を読めてはじめて一人前」と教えられてきたのは、学生時代の渡部部会長も同じ。とても地道で根気がいることだがそこにこそ、実際に生きた土佐人に触れるチャンスがある。「古文書を一枚一枚読むことで自分のなかに形成された歴史像は、自分で確かめたリアルな土佐史。『誰がどんな借金をしたのか』という、些細に感じられることも、まぎれもなく当時の人々の営みが伝わる事実。学生たちにはぜひ、そのリアル感に触れてほしいですね」。資料を読み解き歴史を捉えることができる人材の育成も、県史編さん事業の目的のひとつ。それは今日も、資料調査の現場で積み重ねられている。

「くずし字」で書かれている江戸時代の古文書。くずし字に関する辞典はもちろん、当時の地名などを参照しながら、書かれている内容を解読していく。読み解くのは多くの経験が必要だ。

参加者には「実家にある古文書を読んでみたい」という高い意欲を持った学生も。

昭和37年、大分県生まれ。高知大学・名古屋大学大学院を経て、平成7年に「土佐山内家宝物資料館」学芸員に。平成28年、「高知県立高知城歴史博物館」館長に就任。高知県史編さん事業では、近世部会長を務めている。

渡部（わたなべ） 淳（じゅん）さん

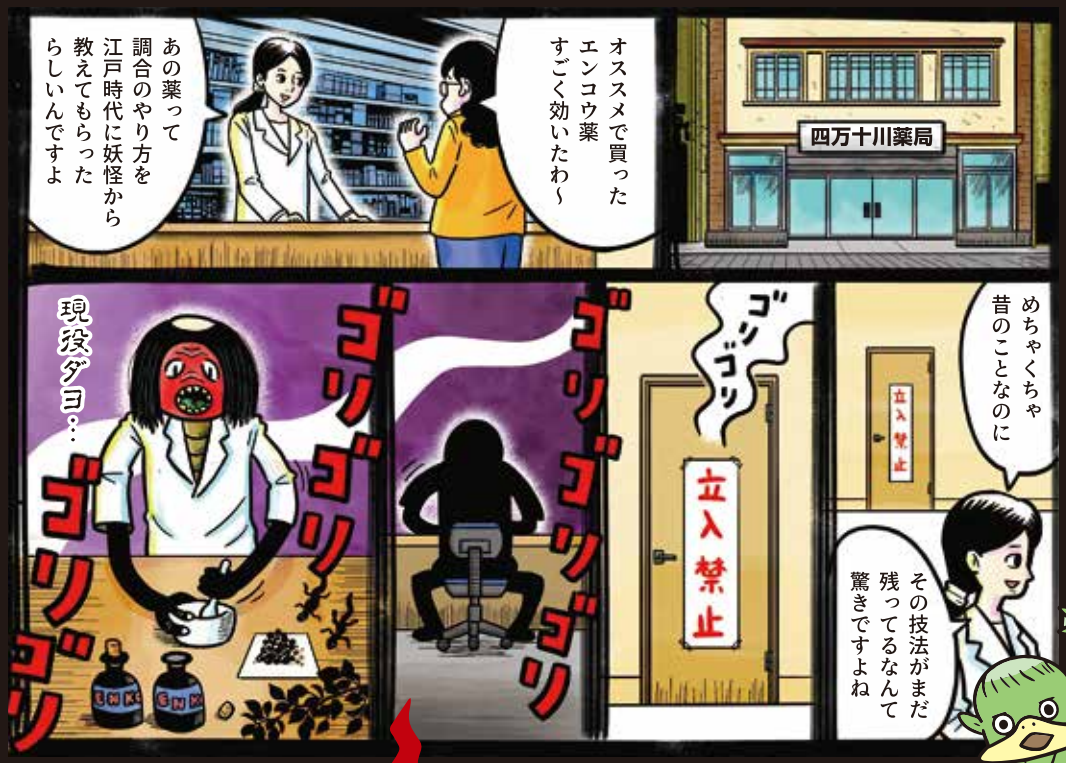
令和高知の妖怪大図鑑

パケペディア

其の二

AM3:00　　80%

猿猴（えんこう）



実は義理堅くて律儀？各地に伝説が残る「猿猴（えんこう）」

「猿猴」は、水中にいて人や馬を川に引き込む妖怪で、他県の河童（かっぱ）に相当する。江戸時代の土佐では河太郎とも呼ばれていたが、現在は愛媛県にも共通する猿猴の名称が主流になっている。本山町、本川村（現いの町）、十和村（現四万十町）などでは、盆の16日に川に行くと猿猴に引き込まれるという言い伝えが残されている。

そのほかの地域では、猿猴といえば、川に引き込むことに失敗して今後は人命を狙わないと誓ったり、人間に助けてもらったお返しに魚を届けたり、薬の製法を教えたりとさまざまな伝説が各地に残り、怖い妖怪というよりは、義理堅い一面のある可愛らしい印象もある。

四万十町に現存する薬屋では、かつて猿猴から授かったとされる薬が販売されていたという。長らく伝承されてきたであろうその薬、猿猴の思いやパワーが込められていたかもしれない。もしかしたらまだどこかで猿猴が作っていたりして…。

参考文献：47都道府県妖怪伝承百科（丸善出版）

とさぶしからの贈り物

1

P03

高知新聞社

高知県こども詩集『やまもも』第48集　1名様

高知県内の小中学生が書いた詩、約330編を掲載したこども詩集。令和6年4月に発行された最新版を1名様に。
（提供）高知新聞総合印刷

2

しまんと分校連絡協議会　P20

しまんと分校ツイン1室宿泊券　1組様

ゲストハウスの宿泊券（1泊2日）をプレゼント。2名まで宿泊可能。
自然に溶け込むこちらの宿を拠点に四万十町を巡ってみよう。

3

とさっ子タウン手拭い　3名様　P06

こどもが運営するまち「とさっ子タウン」の公式グッズから、可愛らしいオリジナルの手拭いをプレゼント。お仕事ブースの雰囲気が伝わってきそう！

4

QUOカードPay1000円分　10名様

※こちらの賞品をご希望の方は、応募時にスマホで受信できるメールアドレスを記載してください

応募締切／令和6年12月20日

クイズとアンケートに答えて読者プレゼントに応募しよう！

クイズ　「とさっ子タウン」のタウン通貨の名称は？

❶スマホから右のQRコードを読み込んでwebサイトにアクセス
❷応募フォームより、必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※読者プレゼントの応募は「とさぶしwebサイト」もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合は①年代②性別③お住まいの都道府県④とさぶしを手に入れた場所⑤とさぶしを知ったきっかけ⑥良かったコーナー（複数回答可）⑦満足度（10段階評価でお願いします）⑧とさぶしを読んで実際に行ってみたい、食べてみたいなど意識変化はありましたか？（はい／いいえ）⑨「はい」の方。その理由を教えてください⑩とさぶしを読んで、実際に冊子掲載店や場所に行ってみたり、商品を購入してみたりしましたか？（はい／いいえ）⑪クイズの答え⑫希望する商品⑬氏名⑭発送先のご住所⑮電話番号⑯メールアドレス（※デジタルギフトご希望の場合）⑰はみだしコラム（※）をご記入の上、下記の宛先まで締切日（令和6年12月20日）必着でお送りください。
〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち

●読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。　●プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。　●いただきました個人情報はプレゼントの発送にのみ使用します。
※とさぶし48号より、各ページ下にコラムの掲載を始めます（今回応募していただいたコラムは49号に掲載予定です）。とさぶしに関する「感想」（30文字程度）をお寄せください。掲載は抽選となります。
（例）毎号楽しく読んでいます。高知のお酒文化をもっと知りたい！（高知県・30代）

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI
とさぶし

https://tosabushi.com

webリニューアル！見てちゃ！

発行
高知県文化生活部文化国際課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号（本庁舎5階）
Tel 088-823-9793　Fax 088-823-9296
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp
発行日：令和6年9月30日（季刊）

企画　とさぶし編集委員会
制作　ほっとこうち

バックナンバーの入手方法・お問い合わせ

高知県文化生活部文化国際課（上記）まで
ご連絡ください。

Facebook、LINE、Instagramでも情報配信中！

Facebook　LINE　Instagram

特集

夏のこども

P02
P03 詩集『やまもも』にみる夏のこども
P04 夏の遊びが高知人のルーツ！
P06 とさっ子タウンの夏
P09 「おらんくの室戸大学～サマーセミナー～」で こどももセンセイに！
P10 よさこい祭りでこどもが成長する！
P12 地元で宿題をしよう！
P14 田舎のおじいちゃん・おばあちゃんが高知人のセンセイ

連載

P16 高知の薬味の底力【ショウガ】
P18 憧れのバトン【スクール生×サッカーコーチ】
P20 土佐文化体験記【エビ筒漁】
P22 つないでつむいで 県史編さん室
P24 県史特集【資料調査にみる本当の土佐史】
P26 バケペディア【猿猴】